



18 香川勝廣《鳳凰高彫花盛器》一対

明治三十八年（一九〇五） 銀・金／高彫・象嵌
各D五三・五、H六一・五

本作は明治宮殿鳳凰の間の装飾品として、明治三十六年に宮内省より香川勝廣に依頼され、約三年をかけて完成したものである。前掲二件の御剣刀装とともに香川の代表作として伝えられてきた。本作の製作依頼時には、香川はまだ御剣の短刀拵（前掲No.6）の製作途中で、加納夏雄の製作を補佐した太刀拵（前掲No.5）を含めると、明治二十年代後半から三十年代後半にかけての十数年にわたる期間を、この三件の製作に集中していたことになる。香川はそれらの功績が認められて、明治三十九年に帝室技芸員に任命された。

「鳳凰の花盛器」（『美術之日本』第二巻第六号、明治四十三年六月）および「先帝御記念の御太刀 附鳳凰の御花盛」（『建築工芸叢誌』第八冊、大正元年九月）などに香川の製作談話が掲載されている。それらによれば、本作は胴張りで大きな端反の口をもつ袋形の花盛器で、銀製の素地を黒川栄勝が鍛造で仕上げ、その胴部に高彫した雌雄の鳳凰を各一羽ずつ象嵌している。鳳凰は銀板に金板を貼り合わせ、いくつかのパーツに分けて高彫している。現在は経年変化のため変色して全体が銀地のように見えるが、鳳凰の羽は青金で隈取り、眼球には純金を入れたとある。また、尾羽は表面を純金、裏面を青金にして色味を変えており、完成当初は鳳凰の金と器体の銀の対比がきらびやかな作品であったと想像される。大型の花器にも関わらず、鳳凰の羽一枚一枚の細部描写にまで徹底した香川の特質が表れている。短刀拵、そして本花盛器を製作したこの当時は、香川が最も意欲的で充実した時期でもあった。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections